

というような問題が生まれてきた。このような状況の中で仏教が誕生した。個体の精神的至福あるいは救済は、それ以前のウパニシャッドにも認められるが、その後の仏教がインド思想史において提示した宗教的財であった。ヤスパースは、ブッダ、ソクラテス、孔子、イエスが生きた時代を枢軸の時代と名づけたが、この枢軸の時代をそれ以前の時代と区別するものは個体の精神的至福であった。この宗教的財を仏教は紀元前後まではいわば専有していた。

三 ヒンドゥー教の台頭

紀元後には状況が異なってきた。仏教の誕生以前にヴェーダの宗教は勢力を弱めていたが、仏教や地域の文化を吸収して新しく台頭してきたヒンドゥー教もまた個体の精神的至福に焦点を当て始めたからだ。ヒンドゥー哲学の一派ヴァイシェーシカ学派の『ヴァイシェーシカ経』(一・一)(二世紀頃の編纂)は、ダルマに基づいて現世利益(アビウダヤ)と精神的至福(ニヒシュレーヤサ)があると述べる。個体の精神的至福を追求するヨーガの行法は、初期仏教において重視されていたが、ヒンドゥー教でも注目されるようになった。『ヨーガ経』の編纂は二、四世紀と考えられる。ウパニシャッドを新しく解釈しなおしたヴェーダーンタ学派のシャンカラ(八〇〇年頃)も『バガヴァッド・ギーター』注の序でアビウダヤとニヒシュレーヤサの二種の基本的財として述べている。

四 インド仏教の消滅

このようにヒンドゥー教が精神的至福を基本的な財として提示するようになると、仏教は社会に提示する財を失っていつ

た。ヒンドゥー教は人生儀礼や現世利益を求める供養(プージャヤー)を積極的に執行していたが、仏教はそうした儀礼には冷淡であった。密教は儀礼を積極的に取り入れたが、仏教全体の勢力を回復させることはできなかった。僧院中心主義を採っていた仏教は、イスラームにより仏教僧院が襲撃されると、急速に衰退した。一方、ヒンドゥー教の知識や儀礼はそれぞれの家で伝授されていた。また、イスラームはヒンドゥー教を強制的に改宗させることはしなかった。俗なる世界のなかで明確な財を示すことができなくなったインド仏教は、インド亜大陸より消滅した。北インドがイスラームの政治的支配を受けるようになると、ベトナム、カンボジアなどの東南アジア諸地域において流布していたヒンドゥー教および大乘仏教も急速に衰えた。その後、これらの地域におそらく一四、五世紀になってテラヴァーダ仏教が流布し、今日に至っている。

ミャンマーにおける国家・サンガ関係

藏 本 龍 介

問題設定

上座仏教徒社会の「近代」を考える上では、植民地化のインパクトを検討することが不可欠である。ミャンマーのサンガ(出家者集団)にとって、植民地化のインパクトとは、何よりも経済的な問題として現れた。そこで本発表では、①植民地化によって国家・サンガ関係はどのように変化したのか、②そう

した変化の中で、サンガはどのように存続しえたのかという問題を、経済的な問題に注目して検討することを目的とする。

一 植民地化のインパクト

自ら財を獲得することができないサンガは、在家者からの「布施」に依拠する必要がある。このように経済的に脆弱なサンガが、南・東南アジア社会において定着・存続することができたのは、国家（王権）の強力な庇護があったからである。つまり伝統的な上座仏教国家には、王権がサンガを物質的に支援し、そうしたサンガの存在が王権の支配を正当化するという共生関係があった。もちろん、一般の在俗信徒も布施をしていたが、①仏教施設の建設・修復、②多数の出家者への衣食の支援、③教学（仏典学習）の振興などは、王権にしかできない布施であった。ミャンマーにおいては、植民地化の圧力に抵抗して理想の「仏法王」を追求したミンドン王（位一八五二―一八七八年）がその代表例である。こうした布施によって、王都マンドレーおよびその周辺は、仏教の中心地として栄えた。

それに対し、王権を廃して世俗権力を握ったイギリス植民地政府は、宗教不介入政策、つまり仏教を弾圧することもないければ、支援することもないという立場をとった。それにより、サンガは「仏法王」を失うこととなった。つまりミャンマーにおける植民地化のインパクトとは、上座仏教国家モデルの崩壊であり、それに伴うサンガの「民営化」とでも呼びうる事態であったといえる。

二 在家仏教徒組織の登場

ミャンマーでは、こうした国家体制の変化を契機として、新

しい仏教支援システムが始動することとなった。それが在家仏教徒組織を結節点としたシステムである。一八九〇年代から一九一〇年頃にかけて、都市部を中心に在家仏教徒組織が誕生する。その中心的な担い手となったのは、新しい近代教育制度の下で育ち、都市の経済発展に後押しされて登場した新興中間層である。彼らは王権の喪失を仏教の危機と受け止め、新しい技術（新聞・雑誌・出版）を利用して仏教護持のための様々な活動を行うようになる。

こうした在家仏教徒組織の画期性は、組織的な活動によって一般信徒からの布施を集積し、個人では不可能な規模の仏教支援事業を行うという仕組みをつくった点にある。つまり、王朝期において王が果たしていたサンガ支援は、多様な在家仏教徒組織が分担するような形で引き継がれていく。

三 結論・考察

植民地化によってそれまでサンガを支える巨大なパトロンであった「仏法王」を喪失したサンガは、経済的な危機に陥った。こうした状況の中で、一般信徒の組織的な活動が勃興することとなる。それは国家に頼らないサンガ存続システムの模索でもあった。

他の上座仏教徒社会と比べて、ミャンマーのサンガは国家に対する自律性が高いといわれている。その背景には国家に頼らなくても活動していける経済的な仕組みがあるからであると思われる。そして本発表で検討したように、その基礎は植民地期につくられたといえる。